

シリパ・ケールン発掘概要

- 1956.8.2~7 -

余市町教育委員会事務局

余市シリバ・ケールン(?) 発掘計測概要

発掘 1956年8月2日-7日

14号ケールン

14号ケールンは、余市町港町北方のシリバ山(オニ峰海拔200m, オニ峰260m, オニ三峰180m)オニ峯山麓にある。この附近は余市神社北方約350m, 標高60~80mの南西せる斜面で、東西80m, 南北75mの地域に、大小15~16箇の積石墳がある。14号はそれらの北端で最も高い所に位置し、約30mの間に西より14~13~15号と隣接している。

発掘は昨年度の継続で、8月2日より8月7日までに完了した。石積地形は約20°の傾面に略々南北を長径(6m), 東西を短径(4.6m)の楕円形をなしていた。傾面の下端(石積の南端)には、東西を長径とする長径(3m)短径(1.6m)高さ(1m)の盛土(Mound)があり、その東南部、西南部は圍石積がくづれていた。特に南西部は2m程突出し、人爲的な入口様の石配列をなしていた。

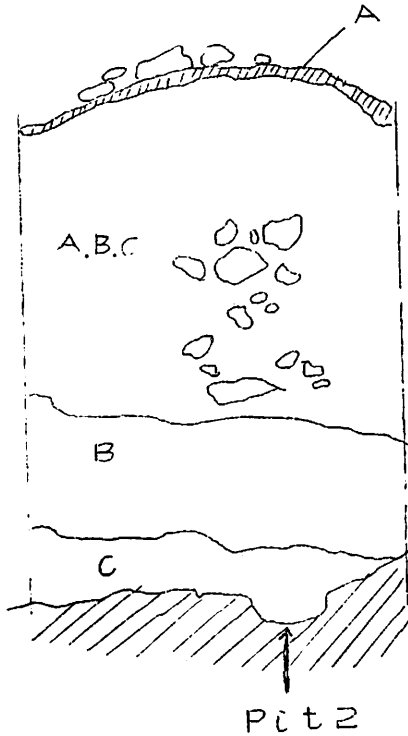
Moundより上方の斜面には溝状の凹地が東面に延び(幅1.6m長さ4m)その上に上部配石とそれをうづめる石堆があり、その東北端にPし1がある。Pし1は昨年発掘され、南北45cm, 東西60cm, 深さ20~30cmの円形の穴で、15, 6箇の石で囲まれていた。Moundは略中央部で2m×1.6m 深さ150cm位の方形状にBoringが行はれた。Boringの底部には 長さ65cm, 巾20~30cm, 深さ10cmの長橋田状の穴Pし2があり、15, 6箇の石片でとりまかれていた。

この附近の傾斜面は 表土として腐蝕土(A戸)が基盤粘土戸(C戸)を覆っている。ケールン中央の東面に延びた凹地の底面は、石片、礫を多く含む人工戸(B戸)である。MoundのBoringの断面は上部より積石、5~10cmのA戸があり、その下部はA,B,Cの混合と見られ戸が65~85cm その下にB戸が約30cm, その下がC戸の粘土戸となっている。このC戸よりPし2見出された。図はBoringの東側の断面を示している。縮尺は20分の1, 左側が傾斜面の高い方向である。

8月6日, Moundの西北側面B戸中より、長さ32cm, 巾2.5cm, 厚さ0.5cmの木炭片が出土した。

(書写頁)

Plan 1 は発掘途中 (8 月 2 日 ~ 5 日) の平面図で縮尺は $\frac{1}{20}$. 上部が斜面の
高い位置である . 東 , 西の側面は 整然と配石し . 階層形の外周であり . 中央の



Pit 1 をふくむ帯状の部分は B 尸上の
石配列を示している . Mound は略図
で示してある . Pit 2 は発掘途中の平
面図を Plan 2 で . 8 月 7 日の完了し
た状態を Plan 3 で示した .

断面図 Sec 1 は発掘初日 (8 月 2 日) の状態
で . 斜面 , Pit 1 , Mound の原形を示して
いる .

Sec 2 . は西側部の入口部分の横断
面で . 楕状の列石と Mound 原形の一
部を示している . 石端は Mound の下
端斜面の高さを示している .

Sec 3 は入口部の縦断面と Pit 1
をふくみ . B 尸上の配石断面が入って
いる .

Sec 4 は Pit 2 の断面で . 発掘完了
時 (8 月 7 日) の状態である . Pit 1
Boring 底面 , Pit 2 及び Mound 上面の略図を示した . Sec 2 ,
Sec 3 は Plan と計測日時を異にするため . 細部 . 特に石配列で符号しない
部分がある .

書写頁 , 概要は大意を知るために計量値を記していないが . 縮尺によるか . 景
図又は野帳によりその詳細を知らねたい .

(北海道大学 名取 茂光 記述)

糸布断 シリバ・ケールン(?) 発掘計画概要 (2)

1956年8月3日～6日発掘

15号ケールン

15号ケールンは14号の東方2.5mの位置にある。発掘前は、北より20°東に向いて長径4.40m, それと直角方向に短径3.10mの楕円状～方形の外面の列石があり、その内側に高さ70cm程度の石堆があった。この間隙列石は西側の3.6mの直線部分と東側1.4mの部分は明瞭に築造を採り、その南側(傾斜面の下方)及び東南側(入口状の部分)は乱雑になっていた。

発掘前の平面図Plan1に記入しており、断面はSec1及びSec2である。

発掘は8月3日より6日までに行われた。Plan1は発掘中の平面図で(縮尺は右)掘石構造が明瞭になるように記した。15号の基本構造は14号と相似形をなし、小規模であるが、類似した構造を示している。即ち、南端(下方)には東西の方向に長径3m, 短径1m, 高さ約40cmの区工(Mound)があり、その北側(上方)には東面に幅1m長さ2.6m, 深さ50cmの帯状凹地があり、東南端は入口構造と思われる人工的な柵状列石があった。

帯状の凹地には積石構造があり、石片でうすめられていた。その両端に長さ45cm, 幅22cmの礎石があり、その下にPit1があった。Pit1は直径20cm, 深さ30～40cmの円形の穴で、その側面、底面は石片でかまわれていた。Pit1の切断面図をSec.4に記した。Mound中央にBoringを行つた際、その東端にPit2が現れた。直径40cm, 深さ10～15cmの円形の穴である。

〔参考〕

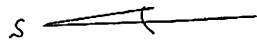
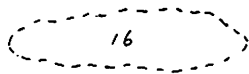
Plan1は8月2日発掘前の外形と、発掘中(8月3, 4日)の配石を示し、実線は発掘後の中央凹地の位置, Boring位置, Moundは階層で記入。Pit1は上部礎石を示してある。Plan2はPit1の礎石の下部で、斜線部が配石、実線は礎石の形である。Pit2は実線で示してある。

切断面Sec.1, 2は発掘前の石堆の輪廓である。Sec.3は南北方向の切断面図で発掘後の帯状凹地ボーリング前のMoundを示す。Sec.4は発掘後の帯状凹地を東西に切断し、Pit1を通過している。

Sec. 5, 6は斜面上部より凹地を横断し、入口部及びMoundの一端を

通っている。Sec7は発掘完了時(8月6日)のMound縦断面でBoring, Pit2, 外側の配石を示している。以上各Secの両端其他の水平面度等の詳細は次回、野営を参照されたい。

(北海道大学 鳥取武光 記述)



ケールン群の配置図(糸布断参照)

1/500

